資料館ノート　第12号　　平成９年11月16日発行

江戸庶民 服装の移り変わり

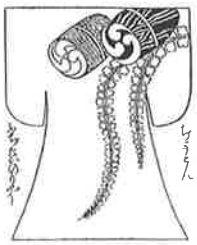
江戸の町を行きかう人々の姿、服装は江戸時代約300年の間にさまざまな変化・流行を生みだしてきました。時代の流れの中で、庶民はどのような服装で日々の生活を送ったのでしょうか。江戸町人の姿からみてみましょう。

1. 江戸初期～明暦の大火・寛文期

“振袖火事”の俗称を持つ明暦の大火（1657年）は江戸城天守閣・大名屋敷・町屋まで、当時の江戸中心部を焼き尽くし、死者は10万人以上といわれています。江戸復興のため幕府は大規模な都市改造計画を実行し、本所深川の開発が行われるなど江戸の町は大きく景観を変えていきました。

町と共に衣服も焼けてしまったため、安土・桃山時代からの衣生活が一変します。皮は防火用の火事羽織などに使用のため値段が高騰し、木綿足袋が普及。更に金襴などの金を使う武家階級の重厚な幅広小袖時代が終わりを告げました。かわって金銀装飾でなく、柔らかく軽い綸子・羽二重・縮緬地に刺繍や染めで花鳥などを描いた新しい小袖（寛文小袖）が誕生しました。こうして江戸の復興景気に伴い、新しい江戸と共に生み出されていく華やかな服装に対する幕府の規制がはじまります。寛文３年（1663年）はじめての禁令が大名女中以上にだされます。

松浦屏風（部分）
江戸初期寛永頃の女性



『御ひいながた』
寛文７年（1667年）刊
当時のファッションブック

2. 元禄前後　―町人への服装禁令のはじまり―

冬木小袖〈白綾地秋草描絵小袖〉
宝永頃　東京国立博物館蔵
深川の材木商冬木家の妻女のために、尾形光琳が描いた小袖

徳川幕府による封建制度は「士農工商」の各身分に対し服装規制の禁令をもち、“服装による身分の違い”を明確にさせました。町人への服装禁令はまず、天和２年（1682年）に出されます。幕府財政の窮乏に反し商品経済の進展につれ、紀伊国屋文左衛門らに代表される豪商が誕生。彼ら裕福な町人たちは芝居・遊里を流行の発進地とし、幅広の帯、結髪普及のため長かもじなど道具類の新風俗を生みます。これに対する禁令に人々は目に触れぬ下着に禁制の鹿の子絞りなどをして身に着けます。この結果、下着までもが禁制対象になっていきました。（享保の改革）

3. 宝暦～天明　―江戸文化・“粋”の確立―

「女の風俗は天地開けてより今程美麗なる事なし」〔『当世かもじ雛形』安永８年（1779年）〕二代目瀬川菊之丞（王子路孝）から流行した“路孝茶”や、小袖の裾模様・裏模様などの地味渋好みを尊ぶ江戸独特の美意識“粋”が生まれます。粋は幕末まで、姿形だけでなく江戸町人の理想精神のシンボルとなり続けます。

4. 寛政の改革以後の服装変化―当時の労働着―

改革の服装規制の中で、時世の流れに即した新しい服装をみつけていきました。

◆職人・行商人に、股引に着物の尻からげスタイルが定着。◆動きやすく、一反で２枚作れる袖無し羽織が流行。◆江戸市中一般の女性が上着に黒繻子の半襟を掛ける（擦り切れ・汚れ防止）。◆前垂（前掛）が広く用いられる（汚れ防止）。

深川木場川並の仕事着
関東大震災（大正12年）前後
江東区教育委員会生涯学習課文化財係蔵

5. 天保の改革～幕末へ

天保期（1830～1843年）《　資料館展示室江戸深川の町の時代設定にあたる　》当時の庶民の衣生活は裏長屋の婦女までも幕府の規制が及ばず、盛り場では武家と町人の見分けがつかない状態となり江戸時代最後の改革が行われます。江戸期を通して絹は禁制対象であり続け、庶民の身近にあったのは木綿でした。当時、裕福な商人たちはインド・オランダからの渡来木綿・唐桟を着ました。それは絹よりも高価な木綿でした。

幕末の江戸を襲った安政の大地震（1855年）後、再び足袋に変化がおこります。それまでの木綿の紐足袋が地震や火事の非常時に不都合ということから、新しく小鉤の足袋が普及し現在に至っています。明暦の大火時同様、幕末の江戸を襲った最大の災害、安政の大地震も衣生活に変化を起こすきっかけとなりました。

江戸時代を通し、人々を包む衣服・布は貴重な財産でした。古着・端切れとして再利用され、行商人に運ばれ、江戸の町を行き交いました。

古手屋（古着屋）の蚤二君に又仕え（新編柳樽）

6.『譚話浮世風呂』にみる庶民の衣服事情

『譚話浮世風呂』は文化６年～10年（1809～1813）に出版された式亭三馬作の滑稽本。江戸の長屋に住む人々の銭湯での会話から、当時の日常生活を描く。女湯での話を聞いてみましょう…

《三編　女中湯之遺漏（女湯の会話）から》

お家「お壁さん今し方表を通ったおかみさんを御覧か」

お壁「いいへ」

お家「とんだはなやかなお形さ。路考茶縮緬（路考茶：青みを帯びた渋い茶色）に一粒鹿子（ごく小粒鹿の子絞り）の黒裏で、下へ同じ一粒鹿子の黒の引返しを二ツ着て、緋縮緬の襦袢に白繻子の半襟で、鼠の厚板（地紋を織りだした厚手の絹織物）の帯のこりこりする九寸幅さ」（中略）

お壁「そりゃアそうと一面に伊予染めだの（伊予すだれを二枚重ねた時に見える木目模様を染めたもの）」

お家「アイサ。路考茶か、鼠か、伊予染さ。みんな昔流行ったそうだが、段々流行返るのだ」

竹馬の古着売
（『守貞漫稿』より）

《二編　女中湯之巻　から》

かさ「ほめへのところへ来る竹馬が通るなら呼んで呉んな」

しつ「（中略）たしか昨日も通ったっけ。（中略）おめへ何を買う」

かさ「片身頃有りゃァ御化け（古い着物を染め直し仕立てかえ、新品のようにみせたもの）が一枚出来ようといふ洒落だアなそうしての、袖なしの肩入れ（肩に当てる継ぎ布）にするから、太織島（粗末な太い絹糸で織った縞模様のきれ）かなんぞ見繕って買うと思うヨ」

女湯の登場人物たち

女湯の登場人物たち
①やかましやのおばあさん②子守り③お乳母どの④上方もの（関西出身の人）⑤裁縫女⑥いじわる女房⑦小娘⑧おしゃべりかみさま⑨嫁⑩田舎からでてきた下女⑪よく気がつく女房⑫女芸者⑬御新造さん（裕福な商人の妻）⑭けっこうな（好人物）婆さま⑮富本節を語る女